SUPPL.

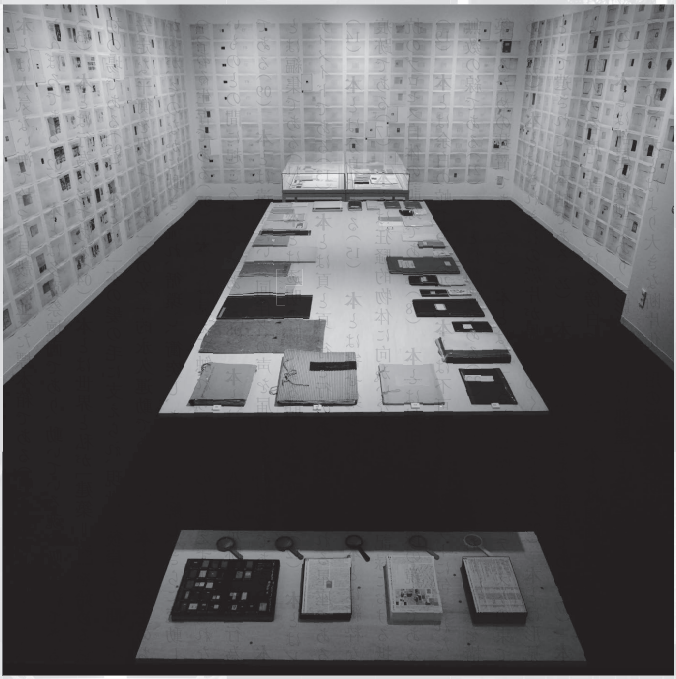
本とは、言葉／オブジェを捕獲する装置である。——「手づくり本」と命名

山腰亮介

*「**変化する詩集**に頭を載せる少年を呼吸する。」(「ÉTAMINES NARRATIVES [3]」『瀧口修造の詩的実験1927 ～ 1937』思潮社、1967年、14頁[初出:『山繭』25号、1928年1月])／「私は本というものを改めて物体化すことを夢みています。[…]ラジオやテレビにゆくのもよいけれど、一人位活字に楯ついて**奇体な本**をつくる人間が現れてもよさそうなものではないか、などと考えるわけです。」(「広告」『コレクション瀧口修造4』みすず書房、1993年、53頁[「池田龍雄作品・安部公房文」(暗森社)のための序文として書かれたがこの本は未刊])／「**私はこのところ「文字のない詩集」**というような本を一冊つくってみたいと思っているところである。それはたとえば絵かデッサンによる詩集といったものを、しゃれていったものともすこし違う。やはり一種の記号性をもったグラフィックなものを考えているのである。私はいま扉をつくったばかりで、あとの白**紙をにらんでいるところ**であるからこのプランは話だけにして置きたい。」(「詩とタイポグラフィ」『コレクション瀧口修造8』(みすず書房、1991年、68頁[初出:『季刊プリント』1962年3月])／「**我流「物ことば」**」(「美術手帖」1964年3月号、美術出版社、33頁)／「**紙にひだをつける、ただそれだけの行為。それは交信紙**[「白紙の周辺」初出においては**「交信詩」**]と名づけられるはずの用箋にすぎない。[…]それらはオブジェであり、言葉でもある。**永遠に綴じられず、丁づけされない本**。」(「白紙の周辺」『余白に書く』みすず書房、1966年、116頁[「白紙の周辺」『みづゑ』1963年3月号、美術出版社、69頁])／「**petit album**[小さいアルバム]」「**hand-made brochure**[手づくり本]」「**'folding' (paper plié) fumé**[「焦がし折(襞づけられた紙)」]」(「余白に書く」『みすず書房、1966年、168-169頁)／「「**秘メラレタ音ノアル**」／**ひとつのオブジェ**。／それはひとつの行為を内蔵してしまったもの。/同時にそれは**投げられた骰子の一面か?**」(「アララットの船あるいは空の蜜へ小さな透視の日々」『点』No.4、点発行所、1972年、5頁。)

本とは、言葉／オブジェを捕獲する装置である。瀧口修造は、生涯にわたり様々な「本」を読み、書いただけでなく、自ら「手づくり本」と呼ぶ〈本〉を制作し続けていた。なぜ瀧口は手づくりで〈本〉を作らねばならなかったのだろうか。それに類するものに対して瀧口は様々な呼称を与えている*。それらは、瀧口が実際に制作した本や、制作過程の本に与えただけではなく、自身の理念を模擬的に示した、いわば「書かれない一冊の本」の呼称でもある。瀧口にとって本とは単に言葉による意味内容の集積ではなく、同時にインクや紙などのレイアウトによって現れる精神の布置でもあるような物(オブジェ)であった。では、この本＝オブジェについて瀧口はどのように語っていたのか。

「本の幾冊かは、また私にとって市販されている以上の「物」になっている。[…]かれら物たちのすべてが、私の認識の枠のなかで、飼い馴らされ、おとなしくしているわけではない。ある物たちは絶えず私に問いかける。いや、私に謎をかけるのである。／私はかれらを鎮めるために、言葉を考えてやらねばならない。それがいまかれらに支払ってやれる私のせい一杯のものだ」(「物々控」『余白に書く』1966年[初出:『美術手帖』1965年4月増刊号〈おもちゃ〉])。



この「市販されている以上の「物」」である「本の幾冊か」のなかに「手づくり本」も含まれるのだとしたら、本の制作と命名(「言葉を考えてや」ること)は、互いに切り離せないものだろう。瀧口において、「物」(オブジェ)とは、自身の「認識の枠」を脅かすような存在である。言葉とは「認識の枠」を規定するものだが、オブジェは、その「枠」を再編成することをうながす「謎をかけ」、あらたな「認識の枠」となる命名を誘う。命名とは、オブジェと言葉のあいだに生じる行為であり、瀧口にとって「手づくり本」とは、言葉とオブジェの界面となった〈本〉のことである。言葉とオブジェの相互作用は、制作のプロセスのなかで絶えず双方向的に生じるものだ。瀧口は「貝殻と詩人」(「近代芸術」1962年[美術選書版、初版1938年。初出:『蟻人形』1937年4月号])において「詩はつねに、少なくとも一度は、欲求する世界に対して、唖であり、聾であり、盲目であるかのように、内部の世界と外部の世界との相剋に苦しまなければならぬ。」と記している。この「内部の世界」(言葉)と「外部の世界」(オブジェ)との相剋の場、〈本〉という界面において「認識の枠」は、再編を迫られることになる。「手づくり本」『アララットの船あるいは空の蜜へ小さな透視の日々』[27](以下、『アララットの船』と略記)は、加納光於と大岡信の共作オブジェ《アララットの船あるいは空の蜜》(1971-72年、以下《アララットの船》と略記)に触発されて書かれた。ここには「秘メラレタ詩ノアル／……」という記述が見られる。これは《アララットの船》に大岡信の詩集『砂の嘴・まわる液体』(1972年)が内蔵されていることの描写だろう。それを「「秘メラレタ音ノアル」／ひとつのオブジェ」とパラフレーズすることによって、『アララット』は音の議論へと移ってゆく。「音はかすかに秘められ／たものの存在だけを／知らせる」。《アララットの船》は「音を発する／ためではなく」、「ある物の存在を／知らせるためでも／なく」、「存在の発生」を知らせる「音を捕獲する」ものとして記述される。このとき、瀧口において詩とは、オブジェの触発による思考過程の記述であり、オブジェと言葉の界面を再編する「存在の発生」の場において生じるものである。すなわち、「手づくり本」とは、言葉／オブジェとしての詩を捕獲する丁づけされない〈本〉である。

*「手づくり本」に類する物に対し瀧口が文章内で与えている呼称を暫定的に列挙する。強調部分は編者によるもの。

「私にも**夢想の本**という、なんとも言い表わし難いものが幼いときからあった。けれども、そのようなものは実現したことがないし、それは実現しない性質のものかも知れない」(「本のつくり」『コレクション瀧口修造5』みすず書房、1994年、84頁[初出:第一回日本ブック・デザイン展-企画図書、1973年3月])／「いまの私たちの**書物**は、造本の原型を西洋から受けつぎながら、画一化して、**豪華版と称せられるものも構造に大差はない。簡素な「仮綴本」の品位を保てないのも根は同じ**であろう。」(「書物というアート」『コレクション瀧口修造5』みすず書房、1994年、221頁[三浦ティニ展、丸善画廊、1977年2月])／「つい先頃、岡崎和郎氏と協力して作った「検眼図」と名づけたマルティプルについて、「検眼図傍白」と題して、同じような**手製草子**のために**折りにふれてノートしているが、つぎつぎに問題が出てきて、いっかな終止符を打てそうにない。**」(「手製草子のための口上」『ユリイカ』1977年8月号、194頁)／「自分には**唯だ一冊のアンソロジーのようなもの、この人間が一生で言いたかったこと書いたことのすべてだというもの**だけが一冊残ったらさぞよいだろう、と。しかしまた私はいまだに「**書かれない一冊の本**」のことを考えてしまう自分を発見する。」(「青天の霹靂記」『コレクション瀧口修造5』みすず書房、1994年、296頁[初出:『花田清輝全集』月報、講談社、1978年11月])／「**この表現の次元、これは絵なのか、奇妙な彫刻なのか、それとも本なのか**」(「荒川修作への小序」『コレクション瀧口修造5』みすず書房、1994年、321頁[初出:荒川修作展、西武美術館、1979年6月])

本影の本　捕遺(アート・アーカイヴ資料展XX「影ともの住む部屋II—瀧口修造の〈本〉—「秘メラレタ音ノアル」ひとつのオブジェ」カタログ　KUAC-C 43)｜編集:久保仁志(慶應義塾大学アート・センター)、山腰亮介(特別協力)｜デザイン:山本浩貴＋h(いぬのせなか座)｜慶應義塾大学アート・センター発行｜発行日:2020年2月1日

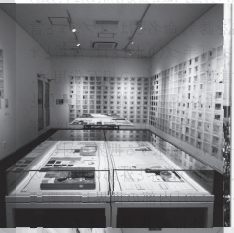
アート・アーカイヴ資料展XX

影どもの住む部屋 II

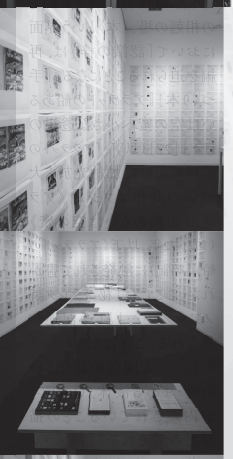
瀧口修造の〈本〉

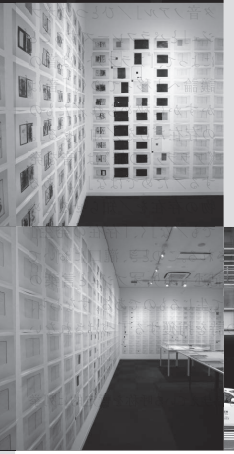
「秘メラレタ音ノアル」ひとつのオブジェ

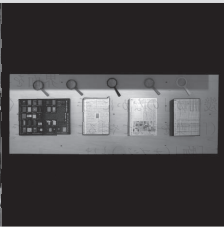
関連トーク・セッション



本とは人気ない海で拾った貝殻を並べた標本箱である(01)　本とは朧であり、おんぼろである(02)　本とは多翼祭壇画であり、動いている魂の吸取紙である(03)　本とは行為の影である(04)　本とは世界と私が「建築＝詩」を始める最初の場である(05)　本とは、一本の髪の毛に支えられ、現世と彼岸との間に不安定な平衡を保っている、二つの文学的永久運動である(06)　本とは発生のちからが、そのなかに動き、流れ、循環し、衝突し、あるいは和解し、さらに流動しつつある生存である(07)　本とは見えて触れられるものと見えず触れられないものとの間に起こるすべてである(08)　本とは透明人間の足跡を追う行為である(09)　本とは遠くにいる同伴者の声を届ける通信手段である(10)　本とは編集である(11)　本とは透明の腕による貼りまぜである(12)　本とはレディメイドである(13)　本とは頁と頁、行と行のあいだで紡がれる星座である(14)　本とは分身である(15)　本とは寄せ集めである(16)　本とは純粋な痕跡である(17)　本とは狂騒的物体に向かいながら行われた記録における抵抗のプロセス自体の記録である。(18)　本とは封印された鏡像の鏡像である(19)　本とは余白の蛇である(20)　本とは不可視の透明カヴァーに包まれた、無数の線である(21)　本とは動線である(22)　本とは記録であり、記憶を構築するための装置である(23)　本とは加工され、複製されたテキストの束である(24)　本とはきれぎれの紙片が帰ってゆく場所である(25)　本とは形見として遺された見本帖である(26)　本とは窓から見える部屋である(27)　本とは無人の客席に語りつづける傍白である(28)　本とは開閉する扉である(29)　本とは部屋の模型であり、「影どもの住む部屋」とは「手づくり本」の模型である。(30)　本とはより大きな断片化作用の断片化、断片の断片である(31)



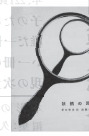




2020年2月21日(金)｜18:00-20:00｜慶應義塾大学アート・センター(慶應義塾大学三田キャンパス南別館2F)

登壇者：笠井裕之、桑田光平、鈴木一平、山本浩貴、山腰亮介、久保仁志

1960年以降、雑誌の切り抜き、銀紙、ラベル・シール、手書きのメモ等、いわゆる断片の寄せ集めによって構成され、
完成のようにも、未完成のようにも見える通称「手づくり本」を作り始めた瀧口修造は、
その制作現場である書斎において、どのような探究を開始していたのか。
「丁づけされない本」として書斎を思考した瀧口は〈本〉にどのようなリミットを与えようとしていたのだろうか。
本展示カタログの執筆者を招き、各「手づくり本」から見出される具体的な諸問題を通して考える。



虫眼鏡で見て下さい。